網走水試ミニレター

No.52 2016. 7. 4

網走地方では7月に入っても気温のあまり上がらない状態が続いています。6月の網走沖の水温も低い状態が続いていました。それでもホタテガイ浮遊幼生の採苗器への付着数は多く、順調な種苗の確保が行われているものと思います。

▼網走水試のホームページに「平成28年度ホタテガイ採苗情報 in オホーツク海」がアップされています。ホタテガイの採苗はホタテガイ漁業のスタートの作業であり、良し悪しが4年後の生産量に係わってきます。オホーツク海沿岸で4～6月に生まれたホタテガイの幼生は約35日間海中を浮遊しながら成長し、殻長が約 0.3mm になると海底や海中の施設に付着するようになります。この習性を利用し海中につるした採苗器で幼生を採集しますが、水温や海流、水塊などが複雑に変化して流され、他の二枚貝等の幼生も発生する中で、ホタテガイの幼生だけをタイミング良く採集することが必要です。このため各地区の水産技術普及指導所では4月以降毎週のように沖合で幼生の状況を調査し、採苗情報として発信しています。

▼ホームページには「平成 28 年度オホーツク海外海放流ホタテガイ貝柱歩留不良予報」もアップされています。貝柱歩留不良の基準は貝全体の重量に対する貝柱の重量が 12%未満になることとしています。今年の予報では春先の餌料環境が良好であり、歩留まりが不良となる可能性はきわめて低いとしています。網走水試では平成元年ころから紋別沖と常呂沖でホタテガイの成長と環境に関するデータを集めており、貝柱歩留不良予報はこれらのデータと今年 4、5 月の観測結果から 6～10 月の貝柱歩留まりの状況を予測しています。6～10 月の歩留まりの平成元年～26 年までの平均は 12.6%、最小値は平成 24 年の 9.5% 、最大値はあの大型珪藻（*Coscinodiscus wailesii*）が大発生した平成 25 年の 15.8%となっています。平成元年以降、歩留まりが 12%未満となった年の割合は 36%で 3 年に一度くらいです。逆に 64%の割合で歩留まりが 12%以上だったことになります。13%以上となった年は 52%、つまり 2 年に 1 度の割合で発生しています。この貝柱歩留まり、6～10 月の平均で話をしてきましたが 4、5 月は例年 10%以下で、水温が上昇してくる 7、8 月になると 12～13%くらいになり、その後減少して 12 月にはまた 10%近くになるのが例年の季節変化です。オホーツク海地まきホタテガイの出荷サイズは 4 年貝でおよそ 200ｇくらいです。歩留まりを考えると貝柱の重量は 25g くらいになります。200ｇのホタテガイのうち貝殻重量は約 100g、軟体部の重量も約 100g です。軟体部重量のうち貝柱以外の生殖腺や中腸腺、鰓、外套膜などは 75g くらいになります。貝殻や中腸腺、鰓などはあまり製品にならないのでホタテガイの価格は、ほとんどが貝柱の価格になります。昨年のオホーツク総合振興局管内のホタテガイの水揚げは約 12 万トンで 300 億円ですから、歩留まり 1%の違いが出荷する側にとっても購入する側にとっても大きな関心事となります。網走水試としても速やかで精度の高い歩留まり情報の発信に努めていきたいと考えています。

（網走水試 上田）